

の四つなり。

1 なむ 願望の義を表すてにをはなり。

花は咲かなむ。風は吹かなむ。
一年は春ながらにも暮れなむ。花のさかりを飽くまでも見む。
一目見し君もや來ると、櫻花、今日はまち見て、散らば散らなむ。
(古今集)

などの如し

2 で 助動詞「ず」と「つ」の活用第二段「て」と結合したる「ずて」の約にて、現在否定を表すてにをはなり。口語「ナイデ」と譯すべし。

勉強もせて遊戯にのみ耽る。
花咲かでは、貸の結ばむ様もなし。
教へで叱る。
見し上ならでは、兎角の判断を下し難し。

などの如し。

3 は 順態假定前提法を表す。動詞形容詞助動詞の法參看 例へば、

勉強せば。成續優等ならむ。
春來ば。花も匂はむ、鳥も歌はむ。

奪はずば。聲かじ。

虎穴に入らずば。虎子を得ざらむ。

立ち別れ、いなばの山の峰に生ふる、まつとし聞かば。今歸り來む。

鶯の谷より出づる聲なくば。春來ることを誰か知らまし。

などのごとし。

4 はや 希望の義を表すてにをはなり。

知らばや。人に見せばや。歸らばや。訪はばや。

見せばや。なをじまの海人の袖だにも、ぬれにぞぬれし、色はかはらじ。(小倉百人首)

五月來ば、鳴きもふりなむ時鳥、まだしきほどの聲を聞かばや。(古今集)

などのごとし。

五 用言第二段連用形に附屬するてにをはは、

は、も、ぞ、こそ、のみ。ながら、し、がて、がてら。て、に、つゝ、なむ。
の十三なり。

1 は 名詞附屬の「は」におなじ。例へば、

善くは。あらず。嬉しくは。あらず。行かすは。あらず。
今日來すば、明日は雪とぞ降りなまし消えずは。ありとも花と見まじや。(來すば「は」

てにをは

は前提法を表す「ば」にて「消えずは」は上の句を指示せるなり

などのごとし。又音便に濁りて、

行かすばあらず せすばあるべからず

なども用ふ。

2 も 名詞附屬のもの第二義と同じく、感歎の義をあらはす。口語「マ」と譯

すべし。例へば、

歸りも行くか。進みも行くか。打ちも燃さむ。(「歸り行く」「進み行く」「打ち燃さむ」の間に入りて、「マ」といふ感歎の意を添へたるなり)。

などのごとし。

3 ぞ 名詞に附屬するぞと同じ。

行きぞわづらふ(行きわづらふといふ意を、強めんために、行きぞわづらふといへるなり。次の例も然り)。

死出の山麓を見てぞ歸りにし。散りぞ亂る。

咲きぞ揃へる。よくぞ來ませる。

などのごとし。

4 こそ これも名詞附屬のこそとおなじ。

咲きこそ揃へ。よくこそ來れ。燃えこそ渡れ。

あけたてば、蟬のなりはへなきくらし、夜は螢の燃えこそ渡れ。(古今集)

などのごとし。

5 のみ これも名詞附屬のものとおなじ。

悲しくのみ思ふ。あしくのみとる。

やさしくのみ取扱ふ。

などのごとし。

(注意) 動詞連用形に「のみ」の附屬すること極めて少し。

6 ながら 名詞附屬の「ながら」の義「ソレゴメニ」又は「ソノマ」より轉じて、一事

を爲しつゝ、他を兼ねる義に用ふ。

讀みながら書く。歌ひながら弾く。歩みながら考ふ。笑ひながら語る。

などのごとし。又更に一轉して「ナレドモ」の義に用ふ。

思ひながら御無沙汰仕り候。

憚りながら御安心下されたく候。

承知しながらこれを行はず。

などの如し。

7 し 名詞附屬の「し」に同じ

聞かすし。もあらず。見すし。もあらず。
あじくし。もあらず。思ひし。まさる。咲きし。揃ふ。
まてといふに、散らでし。とまるものならば、何を櫻に思ひまさまし。(古今集)
などの如し。

8 がて 難の義なり。

去りがてに、思ふ
夜や暗き道やまどへる郭公、我がやどをしも、過ぎがてになく。(古今集)
櫻散る花のところは、春ながら、雪ぞ降りつゝ、消えがてにする。(同)
などのことし。

9 がてら 事の序にといふ義に用ふ。

散歩しがてら訪ふ。博覽會を見物しがてら上京す。
(注意) サ行變格に活用する漢語は、通例「散歩がてら」「見物がてら」など用ふ。これ語尾「し」を省きたるなり。
秋の野も見給ひがてら雲林院に詣で給へり。
我が宿の花見がてらに來る人は、散りなむ後ぞ戀しからまし。(古今集)
などの如し。

10 て 活用第二段所屬助動詞「つ」の活用第二段「て」より轉成せし「て」をばにて、

事終りて後に移る義を表して、接續の用をなす。
春過ぎて夏來る。雨降りて地固まる。
日暮れて道遠し。風吹きて寒し。
日照りて暑し。苦しくて堪へられず。
暑くて苦し。嬉しくて笑ふ。

などの如し。又、この「て」を、他の「て」をばと重ね用ふることも久しくして、一種の「て」をばとなれるもの「にて」として「して」にして「として」の五つあり。左の如し。

イ にて 「ニ於テ」「ニ因リテ」「ニアリテ」「ニナシテ」などの義に用ふ

東京にて逢ふ。 } 「ニ於テ」の義
田舎にて見たることあり。 }

筆にて書く。 } 「ニ因リテ」の義
水にて洗ふ。 }

月影を色にて咲ける卵の花ば。 (「ニナシテ」の義)
ロ と「ト云ヒテ」「ト思ヒテ」などの義に用ふ

さりとして。 } 「ト云ヒテ」の義
あればとて。 }

花見にとて出でたつ。
普認めんとて机に向ふ。
〔ト思ヒテの義〕

ハ して 強意のてはをばしにての添はれるにて「アリテ」テ「モテ」ニテなどの義に用ふ。

幼くして賢し。

巧にして速なり。

答へずして去る。

忠にして孝なり。

来して返りごとす。

飯粒して鯛釣る。

人をして送らしむ。

一人して物を思へば。

二人して相談す。

ニ にして 「ニアリテ」ニテの義に用ふ。

東京にして交りし友。

都にして逢ひける人。

京にして生れたりし女子こゝにして俄に失せにしかば。

〔ニアリテ又はニテの義〕

ホ として 「トアリテ」の義に用ふ。

一人として背くものなし。

人として信なくば其の可なるを知らざるなり。

11 には 重ね用ふる動詞の間に入りて、其の意を強むるてはをばなり。

行きに行く。降りに降る。泣きに泣く。諫めに諫む。

などのごとし。

12 つゝ 活用第二段連用形所屬の助動詞「つ」を重ね用ひたるてはをばにて、動

詞と動詞との接續に用ひて、其の動作の繼續せる義を表す。

讀みつゝ書く。〔讀みつ讀みつ書く。〕飛びつ飛びつ鳴くといふ義なり。

飛びつゝ鳴く。〔讀みつ讀みつ書く。〕飛びつ飛びつ鳴くといふ義なり。

富士の高嶺に雪はふりつゝ。〔雪は降りつ降りつある〕といふ義なり。

などのごとし。

13 なむ 名詞附屬の「なむ」におなじ。

咲きなむ揃へる。見てなむ歸りにし。

よくなむ來ませる。散りなむ亂るゝ。

早くなむ過ぐる。

てになは

などの如し。

六 用言第三段終止形に附屬するてにをは

かし、や、と、とも、な、よ、も、ばかり。

の八なり。

(注意) 終止形附屬のてにをはは、獨り第三段に附屬するのみならず、第二終止法、第三終止法、命令法等に附屬するものありと知るべし。

1 かし 終止したる文句の後に添へて、念を押す意のてにをはなり。

雨降るかし。雨降るにかしを添へたるまでなり。雨降るといふと意義にかはりなし。以下の例も推して知るべし。

風吹くかし。山見ゆかし。あはれなりかし。

斯くぞ覺え侍るかし。花こそ散れかし。

さばかりぞかし。疾く行けかし。

おもひ知れかし。

などの如し。

2 や 第一義 活用第三段終止形のみ附屬して、疑問、及び問掛に用ふるこ

と、名詞附屬の「や」と同じ。

などの如し。

第二義 第一義より轉じて反語の義となる。

思ひきや。忘れましやは。豈悦ばしからずや。

我豈敢てせむや。慨歎の至りならずや。

學んで時に之を習ふ亦悦ばしからずや。

朋遠方より來るあり亦樂しからずや。

人知らずして温ます亦君子ならずや。

咲かざらば、櫻を人の折らましや。櫻の仇は櫻なりけり。

などの如し。

第三義 終止したる文句の後に附屬して、感歎の義を表す。口語ヨの義に當る。

恨みつべしや。耳なれけりや。いみじくあるぞや。おぼしやる方ぞなきや。心こ

そ心を殺すものなれや。打てや。懲せや。行けや。

足鴨のさわぐ入江の白浪の知らずや。人をかく戀ひむとは。

3 と とも 二語、共に逆態假定前提法を表すてにをはなり。(動詞の法參看)

てにをは

漢字「雖(トモ)」の義に當る。形容詞ク活シク活は第一段未定形に附屬す。
との例

繪に書くと筆も及ばじ乙女子が花の姿を誰に見せまし。風吹くと枝を離れて落つ
まじく花とちつけよ青柳の絲。行カズトヨカラウ。
見ズトヨカラウ。

との例

風吹き海暴るとも。繼を解かむ。
聖人また起るとも。我が言に従はむ。
縦ひ江東の子弟憐んで我を王とすと。我何の面目ありて、之を見むや。
花は咲くとも。實は結ばじ。

長くとも。切らじ。惜しくとも。捨てむ。

心こゝにあらずば、見るとも。見えじ。聞くとも。聞えじ。喰ふとも。其の味を知らじ。

今日來すば明日は雪とぞ降りなまし、消えずはありとも。花と見ましや。

千早振加茂の社の姫小松、萬代經とも。色はかはらじ。

(注意) 「歸るとも。行くとも。定まらず。」「悲しとも。思はず。奥山の真木の葉しのぎ降る雪
のいつ解くべしと。見えぬ君かな」などの「と」ともは、名詞附屬のと同じければ混同す
べからず。

な 第一義 動詞活用第三段終止形に附屬して禁止の意を表す。但し、ラ行變

格にありては、第四段連體形に附屬す。

行くな。歸るな。見るな。受くな。起くな。教ふな。我を忘るな。書くな。在るな。居
るな。心隔つな。色に出づな。

などの如し。

第二義 終止したる文句の後に添へて、感歎の義を表す。口語「ナ」の義に當る。

蟬の聲聞けばかなしな。忘れじな。
彼はいとあはれりな。知らずな。
恨みつべしな。契りきな。
花の色は移りにけりな。老いにけるよな。
悪しとこそ思ひたれな。去りたるよな。

などの如し。

5 よ 名詞附屬の「よ」と同じきて「をばにて、終止したる語句の後に添へて、感
歎の義をあらはす。

はかなしよ。物を思ふよ。かはらすよ。忘れすよ。げにしかありけむよ。打てよ。
懲せよ。

などの如し。

6 も 活用第三段終止形に添へて感歎の義を表す。口語「マー」と譯すべし。

忘れかれつも。秋さむしも。

山のまに／＼鶯鳴くも。行くへ知らずも。

春立つらしも。

7 ばかり 活用第三段終止形に添へて「ホド」の義を表す。名詞附屬「ばかり」の

第一義と同じ。

見ゆばかりに追ひ及ぶ。泣きぬばかりにいふ。

死ぬばかり思ふ。

などの如し。

七 用言第四段連體形附屬のてにをはは

が、に、を、も、ぞ、かな。から、のみ、ばかり。よ、か。

の十なり。

1 が に を 三語共に、甲乙の語句を連接するに用ふるてにをはにて、事の裏返る意又は、案外に出づる意をいふ。故に、この三語は、逆態確定前提法に準

すべき性質を表すなり(動詞の法參看)

イ が 「ケレド」「ダガ」などの義。

屢訪問したりしが。面會せざりき。

空は曇るが。雨は降らず。

彼はよく勉強するが。學力進まず。

姿は醜きが。心はうるはし。

今の朝家には只藤房一人のみにて候つるが、未然に凶を鑒みて、隱遁の身となり云々。

などの如し

ロ に 「ノニ」「然ルニ」の義。

日は暮れかゝるに。宿るべき處違し。

よもすがら待ちしに。途に來らざりき。

畿内の軍、未だ靜ならざるに。又、西國西國日を追ひて亂れければ云々。

庭の面はまだ乾かぬに。夕立の空さりげなくすめる月かな。

ほととぎす一聲とこそ思ひしに。待ち得てかばる我が心かな。

などの如し

ハ を 「モノヲ」の義

てにをは

固く約束せしむ。如何しけむ、未だ來らず。
 孔子國政を興り聽くこと三月、魯國大に治まりしを、齊人女樂を歸りて之を沮みき。
 楚昭王書社の地七百里を以て孔子を封ぜんとせしむ、令尹子西可かざりき。
 遂東半島を割讓せしめしむ。露獨佛三國の干渉によりて、遂附したりき。
 夏の夜はまだよひながら明けぬるを、雲のいつこに月やどるらむ。

などの如し

2 も 活用第四段連體形に添へて、「とも」或は「ども」の如く逆態假定前提法、或は、
 逆態確定前提法の意を表すことあるは、正しき格にあらず。然れども近來

空曇るも(曇ルトモ)の義(雨降らじ)逆態假定
 空曇るも(曇レドモ)の義(雨降らず)逆態確定

など或は、逆態假定前提法に用ひ、或は、逆態確定前提法に用ふるもの多きが故に、文
 部省告示文法許容事項において、誤解を生ぜざる限りに於て、ども或はどもの如く
 用ふるも妨なしとせり。例へば

何等の事由あるも(ソリトモ)の義(議場に入ることを許さず)
 刻限は今日に迫りたるも(タレドモ)の義(準備は未だ成らず)
 経過は頗る良好なりしも(シカドモ)の義(昨日より聊か疲勞の状あり)

などの如きは、誤解を生ずることなければ、用ふるも妨なけれども。

請願書は會議に附するも(附すとも)と解せられ、附すれどもと解せられて、意味曖昧な
 り。即ち「附すとも」と解すれば、假令會議に附すともといふ義にて、會議に附すとも附せ
 るとも未だ定まらざることとなり、附すれどもと解すれば、會議に附する事は確定せし事
 となるなり。之を朗讀せず。
 給金は低きも(低くとも)と解せられ、「低けれども」とも解せられて、意義曖昧なり。(應募者は
 多かるべし)。

などの如きは、誤解を生ずれば、用ふべからず。要するに成るべくは、「も」を「とも」或は
 「ども」の義に用ひざるをよしとす。

(注意)「用ふるも」妨なし「見ざるも」可なり「行くも」歸るも別れては「な」の「も」は「用ふることも」
 「見ざることも」行く人も歸る人もなどの義にて、名詞附屬の「も」なれば、「な」の「も」と異なり。
 混同すべからず。

3 ぞ 指し示す意を表すてにをはにて、連體形の下に附屬して文章を結ぶ。
 名詞附屬の第二終止法の係詞なる「ぞ」とは異なり。

命生くるぞ。然おぼゆるぞ。斯くするぞ。あるぞ。なきぞ。ありしぞ。あらぬぞ。
 書きつるぞ。
 讀みたるぞ。いつ参りつるぞ。

などの如し

(注意)「教ふるぞよき」「たよりを聲くぞ辯しき」「買ひ求むるぞよき」などは「教ふる(コト)」「聞く(コト)」「買ひ求むる(コト)」の義にて連體法を直ちに名詞と見たるなり。

4 かな 名詞附屬の「かな」とおなじ。

年を^か経る^{かな}。見ゆる^{かな}。樂しき^{かな}。のどかな^{かな}。思はる^{かな}。常夜の雁のおとづれつる^{かな}。水嵩まされる^{かな}。

などの如し。

5 から 「故ニ」ツレテなどの義に用ふ。

勳強する^{から}。學力も進む^{から}。風暴く波立つ^{から}。船出さす^{から}。吹く^{から}に秋の木ノ葉のしなるれば、うべ山風をあらしといふらむ。(古今集) 浮きて行く紅葉の色の濃き^{から}に、川さへ深く見え渡る^{かな}。

などの如し。又此語をものからといふときは「モノユエ」の義とならずして「モノ」
「ケレドモ」の義となる。

待つ人にあらぬ^{もの}から、初雁の今朝なく聲のめづらしき^{かな}。(古今集)

驚歎する^{もの}から人に語らず。
身に寒くあらぬ^{もの}から、わがしきは人の心のあらしなりけり。
などの如し。

6 のみ 體言附屬の「のみ」と同じ。

進む^{のみ}。知りて退くを知らざるは、猪武者なり。
前言はこれに戯る^{のみ}。
王何ぞ必ずしも利をいばむ。亦、仁義ある^{のみ}。
異端を攻むるは、これ害なる^{のみ}。

などの如し。

7 ばかり 體言附屬の「ばかり」の第二義と同じ。口語「バックカリ」に當る。

水嵩増す^{ばかり}にて、減する模様なし。
道徳は、日に衰ふる^{ばかり}なり。
今來むといひし^{ばかり}に、長月のあり明の月を待ち出でつる^{かな}。(古今集)
などの如し。

8 よ 感歎の義に用ふ。

文を讀み給ひける^よ。人の知らぬ^よ。契りし^よ。

おはしましたるよ。人のつらきよ。行きけるよ。
 物と思ふよ。花散りけるよ。見給ひしよ。
 などの如し。

9 か 第一義 疑問及び問掛に用ふ。

君も試験を受くるか。義経は英雄なるか。
 花咲きたるか。漢高祖の三傑とは誰なるか。
 壺圓に付五升八合換の米壺升の代金幾何なるか。
 秋風の吹上に立てる白菊は、花かあらぬか。涙のよするか。(古今集)

などの如し。

(注一意) 疑問を表すてはをはの「や」は活用第三段終止形に附屬し、「か」は活用第四段連體形に附屬するを正則とす。即ち左の如し。

(上)	(下)	(上)	(四)	
二	一	一	段	
起	蹴	着	行	終
く	る	る	く	止
や	や	や	や	形
起	蹴	着	行	連
く	る	る	く	體
る	か	か	か	形
や	や	や	や	

ね	つ	じ	ざ	ら	る	さ	す	し	ま	む	す	(シ)	(ク)	(ラ)	(ナ)	(サ)	(カ)	(下)	
			り	る	す	す	む	し				ク	ク	ク	ク	ク	ク	二	
行	行	行	行	起	行	起	行	行	行	行	行	行	悪	無	有	死	勉	來	教
き	き	か	か	き	か	き	か	か	か	か	か	か	し	し	り	ね	強	や	ふ
ぬ	つ	じ	ざ	ら	る	さ	す	む	し	む	す	や	や	や	や	や	す	や	や
や	や	や	り	る	や	す	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や
行	行	行	行	起	行	起	行	行	行	行	行	行	悪	無	有	死	勉	來	教
き	き	か	か	き	か	き	か	か	か	か	か	か	し	し	り	ね	強	や	ふ
ぬ	つ	じ	ざ	ら	る	さ	す	む	し	む	す	や	や	や	や	や	す	や	や
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か	か
や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や

てにをは

たり	けり	き	てむ	なむ	けむ	たし	給ふ	めり	らむ	らし	べし	まじ	なり	ごとし	り	なり	ごとし	たり
行きたりや。	行きけりや。	行ききや。	行きてむや。	行きなむや。	行きけむや。	行きたしや。	行き給ふや。	行きめりや。	行くらむや。	行くらしや。	行くべしや。	行くまじや。	行くなりや。	行くごとしや。	行くりや。	行くなりや。	行くごとしや。	行くたりや。
行きたる	行きける	行きし	行きてむ	行きなむ	行きけむ	行きたき	行き給ふ	行くめる	行くらむ	行くべき	行くまじ	行くなる	行くなり	行くごとし	行くり	行くなる	行くごとし	行くたり

然るに、近來の文には、連體形に疑問の「や」を添ふるもの多きより、文部省告示許容事項に於て、

有るや。無きや。面白きや。父に似たるや。母に似たるや。行きたるや。

などの如く、疑問の「や」を連體形に附屬して用ふるも妨なしとせり。

(注意二) 上に、疑の語あるときは、下に疑問のてになは、か」を置くを正則とす。即ち、

誰にか。問はむ。幾何なるか。如何なる故にか。

如何にすべきか。

などの如し。然るに、文部省告示文法許容事項に於て、

誰にや。問はむ。幾何なるや。如何なる故にや。

如何にすべきや。

第二義 感歎の義に用ふ

行く人を招くか。野邊の花薄。

久方の雨も降らぬか。あまづみ君にたぐひて此の日暮さむ。

やみの夜はくるしきものを、いつしかと、我がまつ月も早もてらぬか。

八 用言第五段確定形附屬のてにをは

ば ども ども

の三なり。

1 は 順態確定前提法をあらはす。(動詞の法參看)

花咲けば。實を結ぶ。寒き來れば。暑き去る。

君臣を使ふに禮を以てすれば。臣君に事ふるに忠を以てす。

人衆ければ。天に勝つ。風吹けば。出で立たず。

波風やまれば。同じ處にあり。

水至りて清ければ。大魚棲ます。

年経れば。齡は老いぬ。しかばあれど。花をし見れば。物思ひもなし。

などの如し。又、古體の歌文には、この「ば」を「ニ」「ド」など、逆態確定前提法の義に用ひ

たるもあり。

唐衣新しく立つ年なれば、人はかくこそ古りまさりけれ。秋山の木の葉も未だもみ

ぢれば今朝吹く風は霜もおきぬべし。

道すがら涙おしのごひつゝ、まうで給へれば、對面し給ふべくもあらず。

などの如し。

2 ども ども 二語共に漢字「雖」(イヘドモ)の義に當る。逆態確定前提法を表す。

(動詞の法參看)

問へど答へず。逐へども去らず。惜しけれど捨つ。

美しけれど鄙し。家はあれど人住まず。

春立てど花も匂はぬ山里は、ものうかる音に鶯ぞ鳴く。

忍ぶれど。色に出にけり。我が戀は物や思ふと人の問ふまで。

君君たらざれども。臣臣たり。

父父たれども。子子たらず。

年豊なれども。民に饑色あり。

孟子は賢聖なりしかども。位を得ざりしかば。空言施すことなかりき。

酌めども。盡きず。飲めども。かはらぬ秋の夜の杯。

顔回は陋巷に在りしかども。其の樂を改めざりき。

などの如し。

練習問題

1 左の文中よりて。に。を。は。を抽出して、其の意義を説明せよ。

イ こゝに、本校新築落成式を舉行せらるゝに當り、其の席末に列するを得たるは、余の

てはなは

最も光榮とする所なり。

ロ 上毛野形名、蝦夷を討ちて利あらず。兵皆四散せしかば、夜に乗じて、城を棄て、逃れんとす。形名の妻、夫を勵まし、「其人、今、獨り身を全うして、祖先以來の勇名を辱しめ給ふか。」と自ら、劍を帶び、侍女數人と、弓を取りて、壁に弦を鳴らせり。賊之を聞きて、城中尙兵多からんと思ひ、其の夜、圍を解きて去れり。

ハ 孔子の孫、子思の學說を受け、孔子の道を傳へて、大賢の名あるは、孟子なり。孟子の幼時、母は深く意を其の教育に用ひ、市井の感化を恐れて、三度、其の居を遷せりといふ。

ニ うれし、うれし、うれしやな。人の子どものおしなべて、ふむを御國のおきてなる、學びの道の六年をば、卒へし今日こそ、うれしけれ。柳櫻の春匂ふ、錦をそへて、野も山も。抑、爲朝一人として、殊更、大事の門を固めたること、武勇天下に許されし故なり。件

ホ の男、器量人に越え、心飽くまで剛にして、大力の強弓、矢つぎばやの手利なり。弓手の肘、馬手に四寸延びて、矢束を引くこと、世に越えたり。

て。に。を。は。と。は。如何なるものなるか。

2 體言所屬のて。に。を。は。を列舉せよ。

3 用言第一段所屬のて。に。を。は。を列舉せよ。

4 用言第二段所屬のて。に。を。は。を列舉せよ。

5 用言第三段所屬のて。に。を。は。を列舉せよ。

6

7 用言第四段所屬のて。に。を。は。を列舉せよ。

8 用言第五段所屬のて。に。を。は。を列舉せよ。

9 左の文中の誤を指摘して、其の理を説明せよ。

イ 花ぞ散りけり。

ロ 彼は一錢の蓄さへなし。

ハ 固定資本と流動資本は互に相當の割合を保たしめざるべからず。

ニ 甲と乙丙の和は四十五箇なり。

ホ 君の丹精したる菊は、もはや咲きたるや。

ヘ 楠正成は、何處にて戦死せしや。

ト 金壹圓に五升四合換の白米一升の代金、幾何なりや。

チ 何等の事由あるとも、議場に入ることを許さず。

リ 彼今となりて、後悔するとも、詮なかるべし。

メ 學方はあるも、操行正しからざれば、教員に採用せず。

10 左の文中の三箇のはの意義の異同を辨ぜよ。

今こそあれ、我も昔は、腕力にかけては、人に劣らざりしは。

12 左の三文におけるなむの意義を辨ぜよ。

イ 勝海舟なむ卓見の士なりける。

ロ 櫻花散らば散らなむ。

てはなは

(注)「小夜」「小衣」「小牡鹿」など書けども、小の字の義はなし。
 み。み。吉野。み。熊野。み。山。み。空。み。雪。み。坂。
 (注)「三吉野」「深山」「深雪」など書けども、「三」「深」などの意味なし。
 を。を。簾。を。田。を。野。を。山田。を。筑波。
 (注)「小籠」「小田」「小野」などと書けども、小の意味はなし。
 け。劣。る。け。歴。さ。る。け。長。し。け。近。し。け。疏。し。け。短。し。け。恐。ろ。し。
 い。向。ふ。い。行。く。い。渡。る。
 た。忘。る。た。渡。る。た。計。る。た。弱。し。た。易。し。
 か。弱。し。か。黒。し。か。細。し。

二 接尾語

他語の尾に接して熟語となり、多少の意義を添ふる語なり。接尾語も、一定の慣用法あるものなれば、漫りに用ふべからず。接尾語の重なるものは左の如し。

「ら」など「ども」「たち」「ばら」等などは、名詞に添へて複数を表す。
 ら。我。ら。僕。ら。君。ら。此。ら。少。女。ら。
 など。月。花。な。ど。の。な。が。め。貴。き。賤。し。き。な。ど。物。な。ど。
 ども。物。ども。事。ども。男。ども。船。ども。馬。ども。
 たち。親。王。た。ら。大。臣。だ。ち。友。た。ち。君。だ。ち。

ばら 殿ばら 法師ばら 女ばら
 等 米麥豆粟等 牛馬等 英佛獨露等

其の他、

がた(高位貴族等にいふ) 宮がた。殿がた。華族がた。免生がた。
 様 某様 上様
 殿 某殿
 げ(事物の形容状態をいふ) 人げ。心ありげ。物思ひげ。思はずげ。悪しげ。重げ。嬉
 しげ。惜しげ。
 さ(事物の形状程度をいふ) 深さ。善さ。悪しさ。嬉しさ。悲しさ。
 み(事物の程度をいふ) 深み。高み。青み。赤み。重み。

練習問題

- 1 接頭語とは如何なる語なるか
- 2 接尾語とは如何なる語なるか
- 3 接頭語を有する文三箇を作れ
- 4 接尾語を有する文三箇を作れ

第三篇 文章

第一章 文

一 文 言語を綴りて、完結したる思想を表したるを文又は文章といふ。例へば

花咲く
雪白し
時計柱にかゝれり
猫鼠を捕ふ
校長生徒に卒業證書を授く

愛は神
愛ハ神聖ナリ

のごとき、いづれも完結したる一箇の思想を表したるものなれば、文なり。

(注) 「花咲く」「雪白し」などの如く、極めて簡單なるものにて、思想の完結したるは、文なり。

「隣家の垣根に咲ける白き梅の花」昨年十二月二十日、天賞堂にて價三圓五十錢にて買ひ求めたる柱時計などの如く、言語を長く書き連ねるも、其の思想の完結せざるは、文にあらず。

二 主語 説明語 人の思想は、主たる事物の觀念(即ち主語)と、其の事物の動作、性質、性状等の觀念(即ち説明語)と結合して完結するものなり。「花咲く」「鳥鳴く」「山高し」

「雪白し」などに於て「花」「鳥」「山」「雪」は、主たる觀念なれば、これを主語と名け、「咲く」「鳴く」「高し」「白し」は、「花」「鳥」「山」「雪」の動作、性質、性状等を説明する語なれば、これを説明語と名く。

(注) 主語は名詞より成り、説明語は、動詞形容詞より成るを定則とす。
花^主 咲く^説。鳥^主 鳴く^説。山^主 高し^説。雪^主 白し^説。正成は^主 忠臣なり^説。ナポレオ^主
ンは^主 豪傑なり^説。父^主 父たり^説。子^主 子たり^説。

(注) 「忠臣」「豪傑」「父」「子」は名詞なれども、「なり」「たり」のラ。變活用。助動詞を附して、動詞狀にしたるは、動詞と見做す。

三 客語 補足語 「花咲く」「鳥鳴く」「山高し」「雪白し」の如く、説明語が自動詞又は形容詞なるときは、主語、説明語のみにて完結したる思想を表すことを得。されども、説明語が他動詞なるときは、主語、説明語のみにては、完全なる思想を表すこと能はず。例へば、

猫^主 鼠を捕ふ^説。少女^主 書を讀む^説。教師^主 生徒を褒む^説。
の如き單に

文

三 Holly
Love is Holy
三

Intransitive verb = 不及物動詞
Transitive verb = 及物動詞

猫^主 捕^説ふ。 少女^主 讀^説む。 教師^主 褒^説む。
とのみいひては、其の意義全からず。「捕ふ」「讀む」「褒む」の目的たる語、即ち「何を」といふ語を要す。これを客語といふ(動詞の性参看)

(注) 客語は名詞より成るを定則とす。

等しく自動詞なれども、其性質、不完全自動なるときは、主語説明語のみにては完全なる思想を表すこと能はず。例へば、

時計は^主 柱^説に かゝる。 顔は^主 前^説へ 向^説ふ。 人^主 馬^説より 降^説る。

の如き、單に、

時計は^主 かゝる。 顔は^主 向^説ふ。 人^主 降^説る。

とのみいひては、其の意義全からず。「かゝる」「向ふ」「降る」の係るべき標準、即ち「何に」「何方へ」「何より」といふ語を要す。これを補足語といふ。(動詞の性参看)

(注) 補足語も名詞より成るを定則とす。

等しく他動詞なれども、其の性質、不完全他動なるときは、主語、客語説明語のみにて

は、完全なる思想を表すこと能はず。例へば、

校長^主 生徒に 卒業證書を^客 授^説く。 染物師は^主 朱を^客 藍に 雜^説ふ。 詭辯家は^主 鴛を^客 鴉と 混^説す。

の如き、

校長^主 卒業證書を^客 授^説く。 染物師は^主 朱を^客 雜^説ふ。 詭辯家は^主 鴛を^客 混^説す。

とのみいひては、其の意義全からず。「授く」「雜ふ」「混す」の係るべき標準、即ち「誰に」「何に」「何と」といふ語を要す。これ又補足語なり。(動詞の性参看)

四 文の成分 以上所説の如く、文には主語、説明語、客語、補足語の四成分あり。この四成分の配合によりて生ずる文の形式、左の如し(名詞代名詞の格参看)

- イ、主語、説明語
主格名詞、自動詞——(花咲く)。
主格名詞、形容詞——(山高し)。
- ロ、主語、客語、説明語、主格名詞、處置格名詞、他動詞——(猫鼠を捕ふ)。
- ハ、主語、補足語、説明語、主格名詞、副格名詞、不完全自動詞(時計は柱にかゝる)。
- ニ、主語、客語、補足語、説明語、主格名詞、處置格名詞、副格名詞、不完全他動詞(染物師は朱を藍に雜ふ)。
- ホ、主語、補足語、客語、説明語、主格名詞、副格名詞、處置格名詞、不完全他動詞(校長生徒に卒業證書を授く)。

五 叙述語 叙述部 客語補足語説明語は、いづれも主語の動作性質性狀等を叙述する語なれば、これを一括して叙述語又は、叙述部といふ。前例の文にていへば左の如し。

花^主 咲く。 猫^主 鼠を^客 捕ふ。 時計は^主 柱に^補 かゝる。 染物師は^主 朱を^客 藍^補 に^客 染ふ。 校長^主 生徒に^補 卒業證書を^客 授く。

六 修飾語 主部 客部 補足部 説明部 主語、客語、補足語、説明語は、他の語を添へて、其の意義を種々に修飾することあり。其の添ふる語を修飾語といふ。修飾語は、其の添ふべき語の上にあるを正則とす。主語と其の修飾語とを合せて主部とし、客語と其の修飾語とを合せて客部とし、補足語と其の修飾語とを合せて補足部とし、説明語と其の修飾語とを合せて説明部とす。而して、客部、補足部、説明部を合せたるは、叙述部なり。左に數例をあぐ。

梅の^主 花^主 美しく^修 咲く。^叙

駿河なる^主 富士山^主 いと^修 高し。^叙

隣家の^主 猫^主 大きな^修 鼠を^客 巧に^修 捕ふ。^叙

学校の時計は^主 立關の^修 柱に^補 東向に^修 かゝれり。^叙

熟練なる^主 染物師は^主 少量の^修 朱を^客 溶解したる^修 藍に^補 巧に^修 染ふ。^叙

温乎たる^主 校長^主 優等なる^修 生徒に^補 箱に納れたる^修 賞品を^客 手づから^修

授く。^叙

七 主語の成立 主語は、主格の名詞代名詞より成る。例へば、

文

波こそ 立て。
[主語] [主格]

(注)「波が立ッ」といふことを強くいひたるなり。命令の「立て」と誤るなけれ。

風 枝を・折る。 彼は よく 勉強す。
[主語] [主格] [主語] [主格]

教ふるは 學ぶの半なり。
[主語] [主格]

(注)「教ふる」を一の名詞と見たるなり(動詞連體法參看)

善きは 賞せらる。
[主語] [主格]

(注)「善き」を一の名詞とせるなり(形容詞連體法參看)

人性は善なりとは 孟子の 説なり。
[主語] [主格]

(注)「人性は善なり」を一の名詞とせるなり

風 吹け。 花 咲け。 鶯 來鳴け。
[主語] [主格] [主語] [主格] [主語] [主格]

(注)「風吹け」「花咲け」「鶯來鳴け」などの「風」「花」「鶯」は普通の主格と其の性質異なるが故に、呼格といひて、別つても可なれども、廣くいへば、これも主格の一種なれば、本書はこれを區別せず。

八 客語の成立 客語は、處置格の名詞、代名詞より成る。

馬 車を 引く。 雀は 作物を 荒す。
[客語] [處置格] [客語] [處置格]

彼は 戯るゝを 好む。
[客語] [處置格]

(注)「戯るゝ」を一の名詞とせるなり(動詞連體法參看)

風は 波を 岸に 打ち寄す。 天 雪を 降らす。
[客語] [處置格] [客語] [處置格]

我 彼を 訪ふ。 教師 我を 招けり。
[客語] [處置格] [客語] [處置格]

九 補足語の成立 補足語は副格の名詞、代名詞より成るものとす。

人 馬に 乗る。 我 汝に 語らむ。
[補足語] [副格] [補足語] [副格]

朋友 遠方補足語より 來たり。

判事 原被兩造補足語に 判決を 申渡す。

大なるは 小補足語きに 優れり。

(注)「大なる」と「小きき」の一の名詞とせるなり(形容詞連體法參看)

一〇 説明語の成立 説明語は、動詞、形容詞、及、動詞形容詞に助動詞の附屬せるもの、體言に助動詞「なり」「たり」「ごとし」等の附屬して動詞狀となれるものなどより成る。

雨 降る。説明語 動詞 月 清し。説明語 形容詞 楠正成 湊川に 戦死す。説明語 動詞

仁者は 山を 樂しむ。説明語 動詞 日 暮れたり。説明語 動詞 月 出でず。説明語 動詞

新高山は 日本第一の 高山なり。説明語 名詞 助動詞

落花 雪の説明語 名詞 助動詞ごとし。 父 父たり。説明語 名詞 助動詞

平清盛 太政大臣たり。説明語 名詞 助動詞

一一 修飾語の成立 體言、名詞、代名詞の修飾語は、動詞、形容詞、助動詞の連體法、及び名詞、代名詞の領格より成り、用言、動詞、形容詞の修飾語は、副詞より成る。故に、主語、客語、補足語の修飾語は、多くは、動詞、形容詞、助動詞の連體法、及び、名詞、代名詞の領格より成り、説明語の修飾語は、多くは、副詞より成るものとす。但し、動詞、形容詞の、名詞に轉成したるものの修飾語は、副詞より成り、名詞、代名詞に「なり」「たり」等の助動詞の附屬して説明語となりたるもの、修飾語は、動詞、形容詞、助動詞の連體法、及び名詞、代名詞の領格より成るものありと知るべし。

1、主語、客語、補足語の修飾語

修飾語 形、連體法、主語 清き月 下界を 照す。 修飾語 動、連體法 流るゝ 水 矢の如し。

行く 動連體法 人は 主語 留まる 動連體法 人を 客 顧みる。

この 代領格 書は 主 日本外史なり。

櫻の 名領格 花は 主 日本心に 喻へらる。

深く 形副詞法 愛ふるは 主 健康に 害あり。

(注)「愛ふる」は動詞を一の名詞と見なせるなり。故に、深くといふ副詞にて修飾せるなり。
(動詞連體法參看)

獵師 大なる 形容詞連體 猪を 客 獲たり。

冬は 暖さ 形連體 衣服を 客 着る。

道に 志す 動連體 士は 主 惡しき 形連體 衣 客 惡しき 形連體 食を 客 耻ぢず。

志わ 動連體 る 主 ものは 代領 その 主 事 終に 成る。

我が 名領格 軍 主 十萬の 名領格 元軍を 客 塵にす。

日本帝國の 名領格 臣民は 主 萬世一系の 名領格 天皇を 客 戴く。

秀吉 尾張の 名領格 信長に 補足語 仕ふ。

暴 形連體 き 主 風 怒れ 助動詞連體 る 客 波を 代領 こなたの 補足 岸に 補足 打ち寄す。

生徒は 昇校すべ 助動連體 き 補足 時限に 補足 後るべからず。

我 手紙を 名領格 故郷の 補足 父に 補足 送れり。

2 説明語の修飾語

文

天下 副詞 大に 修 治まる。月 副詞 甚だ 修 清し。 説明語

ナポレオンは 名詞 古今無双の 修 英雄なり。 説明語

(注)「英雄なり」は名詞に「なり」を添へて説明語としたるものなるが故に「古今無双のこといふ名詞の領格にて修飾せるなり。次の例もこれと同じ。

新高山は 名詞 日本第一の 修 高山なり。 説明語

この 副詞 猫は 修 巧に 修 鼠を 修 捕ふ。 説明語

彼は 形 よく 修 勉強す。善く 修 泳ぐ 修 者は 形 善く 修 溺る。 説明語

細雨 副詞 霏々として 修 降る。 説明語

人事の 副詞 進歩 修 實に 修 驚歎すべし。 説明語

各国 副詞 競うて 修 軍備を 修 擴張す。 説明語

大河 副詞 洋々と 修 流る。 説明語

馬 副詞 ひと 修 速に 修 走る。 説明語

その 副詞 容貌 修 全く 修 父に 修 似たり。 説明語

3 修飾語の修飾語 修飾語を更に修飾することあり。修飾せらるべき修飾語が體言(名詞代名詞)なるときは、連體的に修飾し、用言(動詞形容詞)なるときは副詞的に修飾す。其の例左のごとし。

清き 副詞 月 主 と 副詞 清き 副詞 月 主 下界を 修 照す。

走る 副詞 速に 修 走る 主 馬 主 人を 修 傷けたり。

敵軍 善くノ修 甚 副詞 だ 修 善く 修 防ぐ 説。
 教 教ノ修 悉 副 に 修 教ふる 修 教師は 主 生徒の 敬愛を 受く。
 櫻は 美ノ修 わてやかに 副詞 美しき 修 花なり 説。
 彼は 懇にノ修 い 副詞 と 修 懇に 尊ノ修 其の 弟を 導く 説。
垣根ノ修 隣家の 名領格 垣根の 名領格 梅の 修 花 主 咲き 揃へり。
人ノ修 往さかふ 動連體 人の 修 足 主 繁し。
 我は 彌生ノ修 春 名領格 の 修 彌生の 修 曙を 客 愛す。
國民ノ修 偉人な 形連體 き 修 國民の 修 歴史は 主 無意味なり。

築き固め ノ修 アスファルトを以て 築き固めたる 修 道は 主 石道の如く激動 甚しからず。
 雪は 積りノ修 真白に 副詞 積りたる 修 時をのみ 客 愛すべきものは。
子供ノ修 稚 形連體 さ 名領格 子供の 助動連體 父たる 名領格 家の 主人ノ修 主人たる 修 者は 主 その行を 正しく 修 せざるべからず。

4 修飾部 修飾語と修飾語の修飾語とを合せて修飾部とす。

前例の文に就きて説明すれば左のごとし。

清き 清きノ修 と 修 清き 部 月 主 下界を 照す。
 懇に 懇ノ修 懇に 修 教ふる 部 教師は 主 生徒の 敬愛を 受く。
 走 走ノ修 に 修 走る 部 馬 主 人を 傷けたり。

文

櫻は 美ノ修部 あてやかに 修部 美しき 修部 花なり。 説部

隣家の 垣根ノ修部 垣根の 梅ノ修部 梅の 花ノ主 花 咲き揃へり。

雪は 積ノ修部 真白に 積りたる 積りたる 時をのみ 愛すべき ものかは。

5、枕詞 枕詞も修飾語の一種なり。枕詞は古代の用語にして、其の數二三百あり。其の用は、専ら歌文の口調の足らざるを調へむとするに起り、且つ、言語を飾るものなりといふ。今世に在りては、和歌には、用ふれども、文章には用ふること極めて少く、唯、文體の古きものゝみに用ひらる。而して、古代の用語なるが故に、其の意義の解せられぬものもあり。唯、某の枕詞は、某の詞を修飾するものと心得てあるべし。

枕詞に、名詞を修飾するもの、動詞を修飾するもの、形容詞を修飾するものなどあり。

イ 名詞を修飾するもの

ひさかたの(天、月、空、等を修飾す)

あらがれの(土を修飾す)

あしひきの(山を修飾す)

あらたまの(年を修飾す。因にいふ。新玉と書くより新年の義と思ふは誤なり。「新玉

の年の暮」など年末にもいふにて、新年の義ならぬを知るべし。)

ちはやふる(神を修飾す)

などあり。

ロ 動詞を修飾するものには、

刈菰の(亂るを修飾す)

梓弓(引く、張る、射るを修飾す)

玉櫛(明くを修飾す)

唐衣(着る、裁つ、立つ等を修飾す)

などあり。

ハ 形容詞を修飾するものには、

ねばたまの(黒きを修飾す)

眞木柱(太きを修飾す)

などあり。

二 副詞を修飾するものには

しののめの「ほがら／＼」を修飾す
つがの木の「いやつき／＼」を修飾す
などあり。

ホ 各品詞を修飾するものには

わばたまの(形容詞「黒き」を修飾し、又名詞「夜」をも修飾す)
梓弓(動詞「引く」「張る」「射る」に入る)を修飾し、又名詞「春」「本末」をも修飾す
たまくしげ(動詞「開く」を修飾し、又名詞「葎」「奥」をも修飾す)
などあり。

一二 獨立語 文中の語は、大抵、主部、客部、補足部、説明部の四部に属すれども、特殊の文に在りては、四部の何れにも属せざる語あり。これを、獨立語と稱す。獨立語となるもの左のごとし。

1 呼掛に用ふる名詞は獨立語とす。

獨立語 君よ 君も 博覽會見物に 行かぬか
主 主 修 部 部 部 部
説 説 説 説

瓢や 瓢や 我 汝を 愛す。
獨 獨 主 客 叙 述 部 部
説 説 説 説

郭公よ 汝 聲のかぎりは 我が 宿に 鳴け。
獨 主 獨 主 叙 補 補 補 補 部 部 部 部
説 説 説 説 説 説

正行 汝は 此れより 故郷に 歸るべし。
獨 主 獨 主 叙 補 補 部 部
説 説 説 説

諸子よ 諸子は 將來 國家教育の 重任に 當らざるべからず。
獨 主 獨 主 叙 補 補 補 補 部 部 部 部
説 説 説 説 説 説

2 感動詞も獨立語とす。

あはれ 今年 秋も 往ぬめり。
感 獨 主 一 主 叙 部 部
説 説 説 説

あはや 法皇の 流されさせおはしますぞや。
感 獨 主 叙 部 部
説 説 説 説

すはや 敵こそ 來たれ。
感 獨 主 叙 部 部
説 説 説 説

とんとんとん 感獨 彼は 主 梯子を 客 上り行けり。 叙部

これ 感獨 汝は 主 何を 客 するぞ。 叙部

あれ 感獨 雨が 主 降つて来た。 叙部

まあ 感獨 あなた 主 とんだ 修 御災難でしたな。 叙部

3 接續詞も獨立語なり。

山 主 高し 説 且 接獨 水も 主 清し。 説

余は 主 英語 客 并に 接獨 佛語を 客 學びたり。 説

雨 主 俄に 修 降り出でぬ 叙 しかのみならず 接獨 烈しき 主 風 主 逆巻く 客 浪を 客 岸 補

に 部 打ち寄せたり。 説

(注) 接續詞は、大抵副詞の意義を含むものなれば、副詞として用ひらるゝこと多し。かゝる場合には、修飾語となるなり。(接續詞の條參看)

4 獨立部 獨立語に修飾語を有するものあり、これを獨立部といふ。

我が 獨立 愛する 修 郭公よ。 獨 汝 主 聲の 鳴け がさりは 叙 我が 宿 宿に 鳴け 鳴け。 説

師範學校生徒たる 獨 諸子よ。 獨 諸子は 主 將 下文ノ修 來 補 國家教育の 修 重任に 補 當ら 説

びるべからず。

第二章 句

一 釋義 主語と叙述語とを有するものは、如何に簡單なるものも文なりとする

こと、前章述ぶるが如し。然るに、主語と叙述語とを有するも、其の意義の完結せざるものあり。又、意義完結すれども、文の一部をなすに止まるものあり。此等を句と稱す。

花^主 咲き^叙 鳥 鳴く。

(注)「花咲き」は主語と叙述語とを有して意義完結すれども、なほ、文の一部たるに止まるが故に句なり。

兄^主は 書^客を 讀み^叙 弟は 字^客を 寫す。

(注)「兄は書を讀み」は主語と叙述部とを有して、其の意義完結すれども、なほ、文の一部たるに止まるが故に、句なり。

我^主は 月^主 清き^叙 夜^客を 愛す^叙。

(注)「月清き」は主語と叙述語とを有すれども、其の意義未だ完結せず、客語「夜」を修飾するに止まるが故に、句なり。

君^主 臣^客を 視る^叙 こと 子^客の如し^叙。

(注)「君臣を視る」は主語と叙述部とを有すれども、其の意義未だ完結せず。主語「こと」の修飾語たるに止まるが故に、句なり。

水^主 清ければ^叙 大魚 棲ます。

(注)「水清ければ」は主語と叙述語とを有し、其の意義も完結すれども、なほ、文の一部として「大魚棲ます」を副詞的に修飾するが故に句なり。

花^主は 咲けども^叙 實は 結ばず。

(注)「花は咲けども」は主語と叙述語とを有して、其の意義も完結すれども、なほ、文の一部として、下文「實は結ばず」を副詞的に修飾するが故に句なり。

東京は 人口 多し。

(注)「人口多し」は主語叙述語を有して、其の意義完結すれども、なほ「東京は人口多し」といふ

文の一部たるに止まるが故に句なり。

重盛 彼は 忠孝兩全の人なり。

(注)「彼は忠孝兩全の人なり」は主語と叙述部とを有して、其の意義完結すれども「重盛彼は忠孝兩全の人なり」といふ文の一部たるに止まるが故に、句なり。

二 句の種類 句に、中止句、修飾句、叙述句の別あり。

1 中止句 中止句は、句の叙述語の中止して、文の一部をなして、他の部と對立の地位に立つものをいふ。

中止句
雨 降り 風 吹く。

(注)「雨降り」と「風吹く」とは、對立する句にして、互に他に從屬せず。而して「降り」と「終止せずして、「降り」と中止せるが故に、中止句といふなり。(動詞の法參看)

中止句
山 高く 水 清し。

中止句
九分は 足り 十分は 二倍。

中止句
樵夫は 山に 登り 漁夫は 海に 浮ぶ。

中止句
衣は 肘に 至り 袖 腕に 至る。

中止句
忠言は 耳に 逆ひ 良薬は 口に 苦し。

中止句
孔子は 聖人にして 孟子は 賢人なり。

中止句
猫は 鼠を 捕へ 犬は 夜を 守る。

柔主能制しノ修剛客制説弱主能制しノ修強客制説

2 修飾句 修飾をなす句を修飾句といふ。修飾句に、連體的なるとあり。前者を形容句とし、後者を副詞句とす。

イ 形容句 形容句は、連體法を用ひて、句の叙述語を體言名詞代名詞等に接續する句なり。

人の形容句
行の正しき人は世の信用を受く。

意志強固なる人は艱苦に屈せず。

忠臣は國あることを知りて家あることを忘る。

私のわどのを惜む(ト)は笙の名家の断絶せむ(ト)を恐れてなり。

校長 學術 優等なる生徒に 賞品を 授く。

余 曾て 頼山陽の 作れる 今様を 見たり。

花 咲き句ふ 春よ 我は この 春を 愛す。

詩の 人心を 感發する 事 頗る 大なり。

ロ 副詞句 副詞句は、他の部を副詞的に修飾する句にして、前提法、連用法、及び形容句の副詞と結合したるもの等より成る。

水主 清副詞句くば 大魚 棲叙まじ。

水主 清副詞句ければ 大魚 棲叙ます。

花主 咲副詞句かば 鶯 來叙鳴かむ。

花主 咲副詞句けば 鶯 來叙鳴く。

雨主 は 降副詞句るとも 余は 行叙かむ。

學識主 深副詞句くとも 品行主 修副詞句らずば 其の 人は 世の 尊敬を 受け叙じ。

學識主 深副詞句けれども 品行主 修副詞句らされば 其の 人は 世の 尊敬を 受け叙ず。

桃李主 言副詞句はされども 下 自ら 蹊を な叙す。

彼は 精力主の あり副詞句む 限副 勉強せ叙り。

日主 暮副詞句れかゝるに 途 遠叙し。

雨主 降副詞句りて 地 固叙まる。

3 叙述句 主語叙述語を有するものが更に、他の主語を叙述するものを叙述句といふ。

東京主は 人口主 多叙し。

(注)「人口多し」は主語、叙述語を備へて、其の思想完結せり。而して、この思想完結したる「人口多し」を以て、更に他の主語「東京」の叙述語とするが故に、これを叙述句とするなり。以下の例も之に倣ひて知るべし。

狐は 性質 狡猾なり。

猫は 我 此れを 愛す。

鬚あるものは 我 馬なるを 知る。

英國は 貿易額 減少の 傾あり。

伊藤公は 位 人臣を 極めたり。

清盛は 位 人臣を 極め 身 帝王の 外戚たり。

彼は 其の容顔 父に 似たり。

黄海は 其の 水 常に 濁れり。

日本の 汽車は 其の 速力 西洋に 及ばず。

日本は 良港 多し。

朝鮮は 其の 語脈 日本と 同じ。

第三章 小句

一 釋義 句の主語なきものを小句といふ 例へば、

小句

琴を弾じ客 小 句 説 歌を謠ふ客 小 句 説

善く泳ぐ修 小 句 説 者は善く溺る。

岩倉公は 長袖の人とも補 小 部 覺えぬばかりに説 句 部 剛毅の徳を客 小 部 説 備へし 人なり。

などの如し。

二 小句の種類 小句中に中止小句、修飾小句、叙述小句の別あり。

1 中止小句 小句の叙述語の中止するものをいふ。(動詞形容詞、助動詞の中止法參看)

琴を弾じ客 中止小句 説 歌を謠ふ 人あり。

晴天には 田畑を耕し耕ノ修 中止小句 客 説 雨天には 書を讀む。

老を敬ひ客 中止小句 説 幼をいつくしみ客 中止小句 説 有徳を尊び客 中止小句 説 無能をあはれむ。

善く遊び修 中止小句 説 善く働く。

生れて二代云々ノ修 中止小句 補 小 部 説 一代の宗師となり説 句 死して 百世の儀表となり 聖人なり。

身を修め客 中止小句 説 家を齊へ客 中止小句 説 國を治め客 中止小句 説 天下を平にす。

親を敬ひ客 中止小句 説 子を親しむ 事を知りたるは 藤樹先生の 御恩に候。

2 修飾小句 修飾をなす小句を修飾小句といふ。修飾小句に、連體的なると連用的なるとあり。前者を形容小句とし、後者を副詞小句とす。

イ 形容小句連體的) 連體法を用ひて、小句の説明語を、名詞に連続せしむる句を形容小句といふ。(動詞形容詞助動詞の連體法參看)

身を修むる基は孝にあり。

車掌に頼みおける辨當一の停車場より車中に運び來れり。

外國語を知る(コト)は人を大膽ならしむる始なり。

儉より奢に移ることは易く奢より儉に移ることは難し。

落葉をくゞる細き流の聲は琵琶、琴、月琴の調にも似たり。

松に棲む蟲はその色松の色に似たり。

君が代は千代に八千代にと歌ふ聲聞ゆ。

國を治むる本は家を齊ふる(コト)にあり。

勤儉力行の模範を示したる二宮尊徳翁は眞に百代の師なり。

需要とは物を買はむとする希望なり。

地理學は世界の事情を教ふる學なり。

口は食物を容るゝ關門なり。

副詞小句(連用的) 副詞小句は他の部を副詞的に修飾する小句にて、前提法、連用法及び形容小句の副詞的に結合したるものより成る。(動詞形容詞助動詞の法參看)

御所望ならば 見せ申すべし。

御所望なりとも 大切の品ならば 見せ申すまじ。

御所望なれば 見せ申す。

小句

御所望なれども 副詞小句 大切の品なれば 副詞小句 見せ申さず。

片田舎に 補 住まへば 副詞小句 來り訪ふもの自ら稀なり。

片田舎に 補 住まはゞ 副詞小句 來り訪ふもの自ら稀なるべし。

片田舎に 補 住まふとも 副詞小句 來り訪ふもの絶えざるべし。

片田舎に 補 住まへども 副詞小句 來り訪ふもの絶えず。

成功に 補 急なれば 副詞小句 退屈の念生じて事遂げ難し。

成蟲は 客 子孫を 副詞小句 成育して 副詞小句 其の天職を終ふ。

余 補 英國倫敦に 副詞小句 在りて 副詞小句 東京の一友人に 副詞小句 信書を送れり。

降る 客 雪霜を 副詞小句 しのぎてぞ 副詞小句 若木の梅は香に匂ふ。

舊幕の末の世に 補 至りても 副詞小句 京都と奥州との間の飛脚便は一年數回に過ぎざりき。

事は 客 時機を 副詞小句 失はずして 副詞小句 始むべし。

ロツクは 客 一兒童の 副詞小句 教育法を 副詞小句 説いて 副詞小句 多數生徒を教育する法をいはず。

針と 客 糸との 副詞小句 使ひやうを 副詞小句 知りたる 副詞小句 ばかりにては 副詞小句 仕立物は出來ざるなり。

講堂を 客 開きたるに 副詞小句 堂は 副詞小句 間數 副詞小句 四間あり。

小句

余 豐公の 人となりを 想ふ 襟懷の 爽然たる を 覺ゆ。

ロツクは 智を 研くよりは 徳を 修むるを 教育の要訣とす。

岩倉公は 長袖の 人とも 覺えぬばかりに 剛毅の 徳を 備へおはし
けり。

3 敘述小句 客語と説明語とを合せたるもの又は修飾語と説明語とを合せ
たるものを、敘述小句といふ。

豊太閤 朝鮮を 征伐す。

天下 大に 治まる。

彼は (其ノ容貌) 父に 似たり。(其ノ容貌を略せる文なり)

勤勉とは (人) 規則 正しく 事務に 精出す(コト)を する。

(敘述句の「人」なる主語と「コト」なる客語とを略したる文なり)

筆は (人) (之ヲ) 毛と 竹とにて 造る。

角あるものは (我) 鹿なる(コト)を 知る。

君の 説は (我) 其の 可否を いはず。

龍は (人) (コレヲ) 未だ 曾て 見ず。

稲は (主) (人) (客) (コレナ) 田に (補) 作る。
敘述小句 補小句 説

池は (主) (人) 地を (客) 掘り (中止小句) 水を (客) 湛へて (副詞小句) (コレナ) 造る。
敘述小句 副詞小句 小句 説

三軍も (主) (人) 帥を (客) 奪ふべし。
敘述小句 説

匹夫も (主) (人) 志を (客) 奪ふべからず。
敘述小句 説

博愛は (主) (人) 之を (客) 仁と (補) いふ。
敘述小句 補小句 説

(注意) () 内に書きたる文字は略せられたる語句を補へるなり。

第四章 挿入

他の語句、文等を文中に引用するを挿入といふ。

「男女七歳にして席を同じうせず」は稍嚴に失すれども、今日の如く、男女交際のみだりがはしきよりは優れり。
主 挿入 語

「身體髮膚これを父母に受く敢て毀傷せざるは孝の始なり」とは孔子の曾子に語りし語なり。
主 挿入 語

「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し」とは、成功は急ぐべからずとの義なるべし。
主 挿入 語

「鹿を逐ふ獵師山を見ず」とは如何なる義なるか。
主 挿入 語

「皇國の興廢この一戦にあり各員努力せよ」との信號は、東郷大將が日露海戦に
主 挿入 語

おいて與へたる信號なり。

巧言令色鮮矣仁は孔子の語なり。

恐いもの見たしは人情の常か。

余曾て英國民の動作を記して善く働き善く遊ぶといひき。

世人時間の貴さを一刻千金といふ。

名和長重さらば速に合戦の用意あるべし。定めて追手も來らむ。吾は主上

を迎へ奉りて船上山に入れ奉るべし。諸君は直ちに行在所に參られよといふ。

余大石の溪流の中央に立てるを見て同行者を顧みて如何なる激流も此の大

主 挿入語

主 挿入語

補 足語

補 足語

補 足語

補 足語

補 足語

足

足

足

足

足

足

足

足

足

石を動かすこと能はざるべしといへば其の人曰く此の大石は過般の水害に一

町ばかり動きて上流に溯れりといふ。

若し彼の漢土の詩仙李太白をして今世に生れて此のナイヤガラの瀑布を望

ましめば疑是銀河落九天といへる句は廬山に發せずして正にこゝに發した

るべきことを疑はざるなり。

人は一代名は末代なれば人は死後の名譽こそ大事なれ。

西郷隆盛も英雄終をよくせずの例に漏れず。

人間萬事塞翁が馬とは禍福の交々至るをいふなり。

生徒一同君が代を合唱す。

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

補 挿入語

挿入

二六三

「ひかし、或人、坂田金時に、勇士となるべき工夫を問へるに、臆病の稽古せよ」と教へたりしこと、星野葛山の武學拾粹に見えたり。

人々、人の心は、死後ならでは知りたしといひあへり。

西行法師の道のべに清水ながるゝ柳かげの歌を記せる碑立てり。

善光寺は、信州に在り。「牛にひかれて善光寺詣り」の傳説は、人口に膾炙せり。

後樂園は、天下の樂に後れて樂しむとの古語によりて名けたるなり。

孔子は、性相近し習相遠しといへり。

第五章 成分の並置

文の各成分は、一箇に限らず、二箇以上並置することあり。これを成分の並置といふ。

一 主部の並置

大人も 小兒も 行く。

忠孝は 國體の 精華なり。

犬猫馬牛羊豚は 家畜なり。

牙角嘴爪等は 禽獸の 武器なり。

戸主 及び 家族は 其の家の 氏を 稱す。

金閣寺 及び 銀閣寺は 建築と庭園とを以て 名高し。

芝の 増上寺 及び 小石川の 傳通院は 共に 淨土宗なり。

清新なる 空氣と 清淨なる 水と 清潔なる 皮膚とは 健康に 缺く

べからざるものなり。

上智と下愚とは移らず。

心理學 神學 哲學は形なき學問なり。

天文 地理 物理 化學は形ある學問なり。

汽船と鐵道とは旅人と貨物とを迅速に平穩に運送達す。

菜の葉を食ふ 螟蛉も 屈して 又 伸ぶる 尺蠖も 兒女の忌み

恐るゝ 毛蟲も 腐敗物に 生ずる 蛆蟲も 汚水に 蠕く 子子も 皆

昆虫の幼蟲なり。

二 客部の並置

我は酒も烟草も好まず。

彼は政治 經濟 法律を學ぶ。

静岡は漆器 及 竹細工を産す。

普通の價とは物を製造するに費せる費用と普通の費用とを合せ

たるものなり。

民法に所謂親族とは六親等内の血族 配偶者 及び三親等内の

姻族をいふ。我等は人もなき眺望臺に踞して久しくなるまで月光の美し

きと水聲の幽なると山影の淋しげなるとを見且聞きぬ。

はじめ太閤 小出播磨守政秀 片桐市正且元を 秀頼の師傅になさ

る。(藩翰譜)

伊能忠敬の家は世々酒 及び醬油を醸造したり。

受験者は筆紙墨 及 鉛筆を携帯すべし。

補足部の並置 人々 徒に小智 小利に流る。

諸國の武士 源氏 若くは平氏に屬したり。

京勢 雲霞の如く 淀 八幡に著きぬ。

古人は 口は 禍の門とも 駟も 舌に 及ばずとも いへり。
 吾人の 爲に 最も 重寶なるは 耳と 目とに あらずや。
 春日神社も 興福寺も 藤原氏の 創始なれば これを 藤氏の 氏神と 稱ふ。

楠氏の 勳功は 日月にも 比ふべし。

彼は 最も 多く 力を 讀書 算術に 用ふ。

伊能忠敬は 天文 地理 測量 及び 經濟に 精通せり。

春は 來れり。野に 山に。

彼は 酒と 女とに 心を 奪はる。

蛙は 水中にも 陸地にも 棲む。

四 敘述部の並置

子供は よく 泣き よく 笑ふ。

我は 酒も 飲み 菓子も 食ふ。

彼は 品行 正しく 學力 優秀なり。
 血統は (吾人) 之を 祖先に 受け 之を 子孫に 傳ふ。
 蒔きたる 種は 時 至れば 芽を 出し 葉を生じ 花を 開き 實を 結ぶ。
 吾人の 呼吸するや 入る 息には 酸素を 吸ひ 出づる 息には 炭酸瓦斯を 吐き出す
 言語の 力は 悲しめる ものを 慰め 怒れる ものを なだむべし。
 西洋種の 西瓜は 日本種よりも 砂糖分も 多く 味も 好し。
 徳川家康は 静岡に 老を 養ひ 世を 終へけり。
 物の價は 需要の 供給よりも 多き ときは 高くなり 需要ノ供給ヨリ
 (モ)少き ときは 安くなる。
 配偶者とは 夫よりは その 妻を いひ 妻よりは その 夫を いふ。

我等の 生るゝや(我等) 自營の 道敘を 知らず 自治の 道敘を 知らず
 たゞ 泣く こと敘を 知り 笑ふ こと敘を 知るのみ。
 至尊は 仁慈なる 大御心を 以て 臣民敘を 愛撫し 宏大なる 御靈徳
 を 以て 國家敘を 統治し 給ふ。

春風一陣 空に 晴雪敘を ちらし 地に 綾敘の 紋敘を 敷く。

五 修飾部の並置

知る修(形) 知らぬ修(形) 人あり。

赤修(形) 白修(形) 花あり。

春修(形) 秋修(形) 花を 集む。

彼は 熱帯修(形) 寒帯修(形) 温帯修(形) の 植物標本を 採集せり。

進退 度修(形)に 當り 變化 機修(形)に 應ずる 事は 勇士の 心とする 所な

り。

我は 明日修(副) 必ず修(副) 君を 訪問すべし。

其の 門に 入れば 大木修(副) 生ひ 茂り 竹木修(副) おひ廣がりて とみに 山

里に 來たる 心地す。

風に 吹き折られ 洪水に 押し流されたる 枝の 川に 流れて 遠隔

の 地に 至るも あり。

斷崖 右に修(形) そばだち 深淵 左に修(形) たゞへたる 細道 あり。

度量衡に 一定の 標準なき ときは 物の 輕重長短等は 人毎修(副)に 處

毎修(副)に 時毎修(副)に 異なる こと修(副) なる。

我が 日本修(形)の 固有修(形)の 國體と 國民道德との 基礎は 祖先教に 淵源

す。

其の 體 只 殷湯 夏臺修(形)に 囚はれ 越王 會稽修(形)に 降せし 昔の 夢

に 異ならず。

(注意) 修(形)とせるは修飾部の形容的なるをいひ修(副)とせるは修飾部の副詞的なるをいふ。(句小句の修飾句修飾小句を参考せよ)

第六章 成分の位置

一 成分の正置 文の各成分は左の如く次第するを正則とす。これを成分の正置といふ。

イ 主語 敘述語 説明語

例 花 咲く。 雪 白し。

ロ 主語 補足語 説明語

例 人 馬に 乗る。

ハ 主語 客語 説明語

例 少女 繪を 畫く。

ニ 主語 客語 補足語 説明語

例 孔子 禮を 老子に 問ふ。

ホ 主語 補足語 客語 説明語

例 校長 生徒に 卒業證書を 授く。

(注意) 補足語と客語とある文に於ては、その何れを前とし、何れを後とすべしといふことは、断言し難し。要は、其の文の語勢語調等によりて、適當に配置すべきものとす。故に「ホ」の兩形式は、共に正置なりとす。

修飾語は其の修飾すべき語の上に置くを正則とす。即ち前の形式に各修飾語を配當して生ずる形式左の如し。

イ 主語 補足語 説明語 修飾語 説明語

例 梅の花 いち早く 咲く。

ロ 主語 補足語 説明語 修飾語 補足語 修飾語 説明語

成分の位置

例 洋装主部の 人主部 西洋鞍補部を おきたる 馬補部に 意氣揚々修部として 乗る説部。

ハ 修飾語主語 修飾語客語 修飾語説明語。

例 愛らしき主部 少女主部 梅修部の 繪客部を 絹地修部に 畫説部く。

ニ 修飾語主語 修飾語客語 修飾語補足語 修飾語説明語。

例 長州修部の 偉人主部 吉田松蔭主部 世界の 大勢客部を 當代補部の 俊傑修部 佐久間象補部

山修部に 審説部に 問説部ふ。

ホ 修飾語主語 修飾語補足語 修飾語客語 修飾語説明語。

例 薩州修部の 健兒主部 維新補部の 元勳修部 西郷隆盛説部に 兵修部を 擧げん客部 ことを説部

頻りに修部 勸めぬ説部。

獨立部は文の始に在るを正則とす。但し、接續詞は語又は文の間に在るものとす。

瓢獨部や 瓢獨部や 我主部 汝客部を 愛説部す。

あはれ獨部 今年修部の 秋主部も 往ぬ説部めり。

雨主部 俄修部に 降り出説部でぬ しかのみならず はげしき主部 風主部 逆巻修部く 浪客部を説部

こなた修部の 岸補部に 打ち寄説部せたり。

修飾語の全句全文に係るものは文又は句の前におくを正則とす。

全文修 昔 義經といふ人ありき。

水 清ければ大魚棲まず。

思 内にあらはるれば色外にあらはる。

二 成分の倒置 主語、客語、補足語、修飾語等の正當の位置を顛倒することあり。これを成分の倒置といふ。

成分の倒置は最も重要な部を第一に提示して讀者の注意を惹き或は語句を整へ、或は密接の關係ある語句を近接する等の必要より生ず。

やあ 寄せたりな。雲霞の大敵。

開いた 開いた。蓮華の花が。

大敵を 目前に 我は 控へたり。

西郷隆盛 大久保利通 木戸孝允を 世の人 維新の三傑といふ。

月の桂をも 我ぞ 折るべき。

平軍 相驚きて 思へり 大敵 至れりと。

明日 必ず 來給へ。君。

謹んで 賀す。新年を。

人には 告げよ。海人の釣舟。

かねてぞ 見ゆる。君が 千歳は。

我 切に 願ふ。此の 事の 許可せられむ ことを。

成分の位置

汽車は走れり。いと速に。
〔走れり〕ノ修

ゆふ風寒し。秋の空。
敘述句

秋はうつろふ樹々の色に名のみなりけり。青葉山。(土井晩翠)
全文修

五人兄弟はあり。
〔あり〕ノ修

人知らず。我が心を。
客部

春は來にけり。野に山に。
補部

行け行け。汝。
主

吾恐る。季孫の憂は蕭牆の内にあらんことを。
客部

吾未だ見ず。剛者を。
客部

思ひきや我が敷島の道ならで浮世の事を問はるべしとけ(太平記)
説部
驚の笠に縫ふてふ梅花(ナ)折りてかざいむ老かくるやと。(古今集)
説部

第七章 略語 略句

繁縷なる文章を簡潔にして、讀者をして要點を理解し易からしめんため、語句を省略することあり。これを略語略句或は省語省筆といふ。

略語略句は、語句を省略すとも、分明に解せらるべき場合に限りて用ふべく、猥りに用ふべからず。

略語略句には、主部の省略せらるゝあり、客部、補足部、説明部、修飾部の省略せらるゝあり、てにをば、其の他の省略せらるゝあり。

左に略語略句の例を擧ぐ。(一)内の文字は省略せられたる語句を補へるなり。
(人) 博愛を 仁と いふ。

(吾人) 一合の小豆を 播けば 一升の小豆を得べし。
植物の 種子 多くは 小さくして 輕し。故に(種子) 風の吹くまに

飛散す。

(吾人) つらく 考ふれば (物) 人の 身體程 巧妙に 完全に 作られ
たるもの なし。

手は 屈伸 自在なり。故に (吾人) 之を 動かして 種々の 仕事を
すべし。

(人々) 公園の樹(ヲ) 折り取るべからず。

問 此の 價は 幾何なるか 答 (コノ) 價ハ 拾錢なり。

問 花 咲きたるか 答 (花) 咲きたり

(國家) 滿二十年を 以て 成年とす。

帝國議會は (天皇) 毎年 之を 召集す

(政府) 新に 租税を 課し 及び 税率を 變更する (コト)は 法律を 以
て 之を 定むべし。

肅啓(小生) 一昨日拂曉 高崎を 出發致し候。

さらば 美作の 杉坂こそ 究竟の 深山なれ (吾等)そこにて (鳳釐)ヲ 待
ち奉らん。(太平記)

父子兄弟夫婦朋友の情誼ハ(吾人)年を経るに 従ひ 愈 その 味の 甘美な
る(コト)を 覺ゆるに ならずや。

此の 猫は 鼠を 捕ふるか。

(コノ)猫ハよく (鼠)ヲ 捕ふ。

君は 英語を 學びたるか。

(余ハ)英語ヲ學びたり。

ボートは 決死の 壯士 十七人を 乗せて 一上一下せり。(指揮官)點員す
るに 杉野兵曹長 なし。指揮官の 面上 愁を 帯び來りぬ。「さて(吾)一應
(船中)ヲ搜索せむ。」

河豚汁(ヲ)食はんと思ヒて澤山に 出來は出來たれど (吾)コレヲ食ハんと(ス
ル時)なりて 第一に 箸取る者も なし。(吾等)乞食に 一椀を 取らせて
毒の 有無を 試さんと 衆議一決して 近き 橋の 袂に 持ち行きて

與へ歸りつ。小半時 立ちて 行き見るに(乞食ノ容態)かはり なし。「大丈夫
なり。いざ河豚汁ヲ食ハン」と云ヒテ(コレヲ)残らず食ひをはり、そゝる歩きに、
(一同)彼の橋へ行き(乞食ニ)「どうぢや 最初の 汁は 甘かつたかと 問ふ。(乞
食)旦那様も (アレヲ) 召し上りましたかと 問ふ。(一同)皆(アレヲ)食つたとい
へば 乞食 隠せる 椀を 取り出して それでは 私も(コレヲ) 頂きます
る。

バクテリアは 極めて 微細なる 菌類にして 顯微鏡にて (コレヲ)廓大す
るにあらざれば(吾人)コレヲ見ることを得ず。

長さ(モノ)を取りて短き(モノ)を捨つ。

梶原 佐々木に 續いて(馬ヲ)川ニ(乗)り入れたり。

兄も 教員と なれり。弟も (教員ト)なれり。

君も 馬に 乗るか。余も(馬ニ)乗る。

鏡は 壁に かゝれり。時計は 柱に(カ、レリ)。

今朝 手紙を 認めて (郵便ニ)出せり。

(我)今日(授)業料を (學校ニ)納めたり。

校長 卒業證書を (生徒ニ)授く。

横著なる 酒屋は (酒ニ)水を 雜ふ。

日本 韓國を(日本ニ)併合す。

筆ヲ執りて字ヲ書く。

夜や 暗き 道(ニ)や まどへる 郭公 我が 宿をしも 過ぎがてに 鳴く

(古今集)

(我)茶(ヲ)も 飲み 菓子(ヲ)も 食ふ。

これこそ 運の 盡くる 所の 死狂ひ(ナレ)よ。

今日 休業(ス)。

我こそは 新島守(ナレ)よ おきの 海の あらき 波風 心して 吹け(増鏡)

人々 感じあへりとぞ(イフ)。

其の 振舞 實に 勇ましかりし ことにこそ(アリ)ナレ。

時しも(コソ)あれ。

今日しも(コソ)あれ。

左の文の如きは略語略句の最も多きものなり。

主上は いづくに おはしますぞ。

(主上ハ)黒戸御所に(オハシマス)

上皇は(イヅクニ)オハシマスゾ

(上皇ハ)温明殿に(オハシマス)

劔璽は いづくに(オハシマスゾ)

(劔璽ハ)夜御殿に(オハシマス)

中宮は いづくに(オハシマスゾ)

(中宮ハ)清涼殿に(オハシマス)

と左衛門督次第に(別當ニ)たづねければ 別當 かくぞ答へける (平治物語光頼 参内の條)

第八章 結法

動詞形容詞助動詞の一句一文の末を結ぶに尋常の結法「ぞ」「なむ」「や」「か」の結法「こそ」の結法の三種あり。此の他命令禁止の結法感嘆的結法の二種あり。

一 尋常の結法 尋常文句の末を結ぶには活用第三段終止形(第一終止法)を用ふ。これを尋常の結法とす。

目には 瞭あり。

出づる息には 炭酸瓦斯を 吐き出す。

天は 吾人に與ふるに 清新なる空氣を以てす。

肺胃肝腸の如き内臟は 其の構造 實に 複雑な 極む。

水は 萬物を ばぐむ慈母なり。

軍議 已に定まる。

誓つて 成功を 期す。

迅雷霹靂 天を 墜し 地を 裂かんとす。

千代丸は 既に 黄金山下に 沈没せり。

杉野は 點火の任務を 善くせりと 覺ゆ。

船體に 無数の彈痕を 留む。

一見 人心して 當時を 追想して 酸鼻に堪へざらしむ。

櫻の花は いと美し。

結法

花は 咲きけり。
 人の心は 死後ならでは 知りがたし。
 抑 懐舊の情は 人間感情の中にて 最も罪なくして 最も優美なるものなり。
 伊豫守稻葉一徹 初めは美濃の齋藤家の麾下なりしが 後に織田信長に 降りけり。

空しく 一年を 歴。

日本臣民たるの要件は 法律の定むる所に 依る。

禁治産者の 行爲は 之を取消すことを 得。

法人には 一人 又は 數人の 理事を 置くことを 要す。

二 「ぞ」なむ「や」かの結法 文句中に「ぞ」なむ「や」か「のてにをはあるときは、其の末を結ぶに活用第四段連體形(第二終止法)を用ふ。これを「ぞ」なむ「や」かの結法とす。

イ 「ぞ」の係結

花ぞ 咲く。
 水の葉ぞ 落つる。
 試験をぞ 受くる。
 人ぞ 来る。
 彼ぞ よく勉強する。

犬ぞ 死ぬる。

かくぞ 侍る。

花ぞ 美しき。

雨ぞ 降りぬ。

月をぞ ながめむ。

今日來すば 明日は 雪とぞ 降りなまし。

強ひてぞ 行かしむる。

名をぞ 取らする。

我等が畏敬する校長ぞ 手づから 卒業證書を 授けらる。

名をぞ 得つる。

春ぞ 過ぎぬる。

花ぞ 咲きける。

昨日ぞ 行きし。

緑なる 一つ草とぞ 春は 見し。 秋は 色々の花にぞ ありける。(古今集)

雁ぞ 鳴くなる。

花ぞ 咲くめる。

山吹の花に 心ぞ うつろひぬらむ。

奥山の雪解の水ぞ 今まさるらし。

日韓併合によりて 朝鮮人も 生命財産の安全をぞ 保たるべき。

彼ぞ 廣瀬中佐の銅像なる。
「なむ」の係結 「ぞ」を用ふる場合に「なむ」を用ふるも差支なし。但し「なむ」は文章には用ふれども和歌には用ひず。

風になむ 散る。
花になむ 落つる。
人になむ 任する。
洋服になむ 著る。
朋友になむ 遠くより 來る。
數學になむ 研究する。
後をも 煩みすになむ 往ぬる。
かくなむ やどりは ある。
我が尋ぬる 人なむ 見えぬ。
家になむ こもれる。
人になむ ありける。
「なむ」の係結
花や 咲く。

人なむ 恨むる。
草や 枯る。
和服なむ 著る。
客や 來る。
勉強なむ する。
夜や 暗き。道や 惑へる。郭公、(古今集)
月や あらぬ。春や 昔の春ならぬ。(伊勢物語)
人になむ 遇はむ。
花や 今宵のあるじならまし。
年の内に 春は 來にけり。一年を 去年とや。いはむ。今年とや。いはむ。(古今集)
春立つ今日の風や 解くらむ。(古今集)

ニ 「か」の係結
何をか 問ふ。
誰をか 戀ふる。
誰にか 任する。
いづれか よき。
誰か 居らむ。

何^かあらむ。
 誰^かを^か大將^{たら}しむる。
 誰^かに^か讀^{ます}する。
 誰^かに^か問^はる。
 誰^かに^かせ^{まし}。
 花^かに^か咲^きつる。
 小夜^かに^かふ^けぬる。
 何^かを^か見^たる。
 何^かに^か見^たる。
 昨日^かに^か花^の散^るを^か惜^みし。
 今日^かに^か咲^{くら}む。
 いか^にか^にす^{べき}。
 (注)「何」「誰」「幾」「いづこ」等の疑問詞あるときは、其の下に「か」を含めるものと見做して「か」の係結の法に従ふものとす。

いか^にか^に言^ひつる。
 いか^にか^に言^ひすべき。
 いづ^こに^かあ^る。
 誰^をか^に訪^へる。
 この品は幾何の價にて(か)買へる。

三「こそ」の結法、文句中に「こそ」のてにをはあるときは、其の末を結ぶに活用第五段確定形第三終止法を用ふ。これを「こそ」の結法とす。

書^をこ^そ讀^め。
 花^をこ^そ落^つれ。
 試^験を^こそ受^くれ。
 よ^き衣^をこ^そ著^れ。
 勉^強こ^そす^れ。
 月^見れ^ば千^々に物^をこ^そか^なし^けれ。
 書^をこ^そ讀^まね。
 花^をこ^そ散^らめ。
 人^をこ^そ見^えれ。秋^は來^にけ^り。
 春^行く^とこ^そよ^そに見^まし^か。
 人^にこ^そ働^かし^むれ。
 かく^とこ^そ思^はる^れ。
 偽^をこ^そい^はざ^れ。
 花^をこ^そ咲^きつ^れ。
 敵^をこ^そ來^たれ。
 花^をこ^そ咲^きけ^れ。
 結法

昨日こそ早稲とりし。か。
 雁こそ鳴くなれ。
 雪とのみこそ花は散るらめ。
 花こそ咲くらし。
 かくこそあるべけれ。

四 命令的結法 命令又は禁止の場合には活用形第六段命令形又は禁止の語を附したるものを以て文句の末を結ぶ。これを命令的結法とす。

花 咲け。
 早く起きよ。
 我に 教へよ。
 制服を 著よ。
 明日早朝 我が家に 来よ。
 昔の袂よ かわきだにせよ。
 今更に 山へ 歸るな。郭公(古今集)
 あるじなしとて 春を 忘るな(菅公)
 己の欲せざる所をば 人に 施すこと勿れ。

五 感歎的結法 感歎的語調にて文句の末を結ぶことあり。これを感歎的結法

とす。

捨てられむことの あさましきよ。
 思ひ得たる事の うれしきよ。
 絶えはつるものとは 見つゝ 蜘蛛の 絲を たのめる心細きよ。(後撰集)
 秋萩を しがらみふせて 鳴く鹿の 目には見えすて音の さげけさ(三)。
 雲かくれにし夜半の月かな。
 老いず死なすの薬もが。
 君が八千代に 逢ふよしもかな。

六 「ど」なむ「や」か「こそ」の係詞に對して結をなさざることあり。其の場合左の如し。

1 中止句形容句副詞句の下文に連なるものは結をなさず。

郭公 一聲とこそ 思ひしに 待ち得てかはる 我が心かな(古今集)
 (注)「一聲とこそ思ひし」と係結すべきを、下文に連れんが爲に「思ひしに」とせしなり。
 雪かとぞ よそに見つれど 櫻花 折りては 似たる枝なかりけり(玉葉)
 (注)「雪かとぞよそに見つる」と係結すべきを、下文に連れんために「見つれど」とせるなり。
 めづらしき春は 明日とぞ 聞ゆれど 暮れなむ年を何かをしまむ(千五百番)

(注)「明日とぞ聞ゆる」と係結すべきを、下文に連れんがために、「聞ゆれば」とせるなり。
後宇多の御門こそ。ゆゑしき稽古の君に。まし／＼しに。云々(正統記)

(注)「後宇多の御門こそ云々まし／＼し」と係結すべきを、下文に連れんがために、「まし／＼しに」とせるなり。

2 言掛の文も結をなさず

小夜千鳥 聲こそ 近くなる。海鴻 傾く月に 潮や 満つらむ(新古今集)

(注)「聲こそ近くなれ」と係結すべきを、鳴海に言ひ掛けんがために「なれ」と結ばざるなり。言掛の意味は、「聲が近クナルト云ふ鳴海」といふ義にて、聲の近くなる。と、鳴海とを兼ねたるなり。

いづくにか。今宵は 宿を かり衣 日も 夕暮の 峯のあらしに。

(注)「いづくにか。今宵は宿を借らむ」と係結すべきを、狩衣に言ひ掛けんがために結ばざるなり。言掛の意味は、「宿を借りヨウト云フ狩衣」といふ義にて、借と狩とを兼ねたるなり。

老の波も よりくるや 木の 下蔭の 落葉かくなるまで 命ながらへて 猶いつまでか。いきの松(高砂)

(注)「猶いつまでか生きむ」と係結すべきを「いきの松」に言ひ掛けんがために、結ばざるなり。

我は 誰をか 呼子鳥 たつきも知らぬ山中に云々(常麿)

(注)「我は誰をか呼ばむ」と係結すべきを「呼子鳥」に言ひ掛けんがために、結ばざるなり。

栗田口にも 著きしかば 今は 誰をか 松坂や 関のこなたと 思ひしに。

(注)「誰をか待たむ」と係結すべきを松坂に言ひ掛けんがために結ばざるなり。

第九章 文の種類

文法上にいふ文は、組織上より分てば、單文、複文、重文の三種となり、性質上より分てば、平叙文、疑問文、命令文、感歎文の四種となる。

一 組織上の種類

1 單文 主部、叙述部の關係單純なるを單文とす。これに、一箇の主部と一箇の叙述部とより成るもの、一箇の主部と數箇の叙述部とより成るもの、數箇の主部と一箇の叙述部とより成るもの、數箇の主部と數箇の叙述部とより成るもの、四種あれども、何れも主部、叙述部の關係單純なれば、單文なり。

鳥主鳴叙く。

山主甚修だ叙高説し。

倫敦の煤煙は有名なり。

ビスマークもガンベツタも大政事家なり。
頼朝義経は兄弟なり。

西郷木戸大久保は維新の鴻業を翼賛したり。

男も女も大人も小兒も行く。

蒔きたる種は芽を出し葉を生じ花を開き實を結ぶ。

言語の力は悲しめるものを慰め怒れるものをなだむべし。

血統は吾人これを祖先に受けこれを子孫に傳ふ。

受験者は筆紙墨及び鉛筆を携帯すべし。

稲も稗も春蒔き秋收む。

複文 主部叙述部の關係單純ならざるものを複文といふ。形容句及副詞句を含める文は主部叙述部の關係複雑なるが故に複文なり。

行の正しき人は世の信用を受く。

余曾て頼山陽の作れる今様を見たり。

詩の人心を感發するコトは其の勢力遙に散文に過ぐ。

意志強固なる人は艱苦に屈せず。

水清ければ大魚棲まず。

結法

雨は主降るとも副詞句 余は主行かむ叙句。
 學識主深くとも副詞句 品行主修まらずば副詞句 其の人主部は世の尊敬叙述部を受け部じ。
 雨主降りて叙句 地主固まる叙句。
 桃李主言はされども副詞句 下主自ら叙述部 蹊を叙述部 なせり。
 一犬主 虚に副詞句 吠えて叙句 萬犬主 實を叙述部 傳ふ。
 花主咲き叙句 鳥主鳴く叙句。
 雨主降り叙句 風主吹く叙句。

3 重文 主部叙述部より成れる句を並列せる文を重文といふ。中止句ある文は重文なり。

山主高く叙句 水主清し叙句。
 彼は主去り叙句 我は主留る叙句。
 ワシントン主は大統領叙述部となり部 ナポレオン主は皇帝叙述部となれり部。
 月主落ち叙句 鴉主鳴く叙句。
 猫は主鼠を叙述部 捕へ部 犬は主夜を叙述部 守る部。
 忠言は主耳に叙述部 逆ひ部 良薬は主口に叙述部 苦し部。
 孔子は主聖人叙句にして部 孟子は主賢人叙句なり部。
 虎は主死して叙句 皮を叙述部 留め部 人は主死して叙句 名を叙述部 留む部。

二 性質上の種類

1 平叙文 事件をありのままに叙述する文なり。

花 咲く。花 咲かず。花 咲かむ。
犬は 哺乳動物なり。昔 男ありけり。
若菜 摘むらむ。
汽車は 著きたり。

2 疑問文 疑問の詞辭あるを疑問文といふ。

花や 散る。こゝは いづこぞ。
我が思ふ人は ありやなしや。
花散らす風のやどりは 誰が 知る。

我 誰をか 師とせむ。

君は 何を 好むか。

いつまでか 野べに 心の あくがれむ。

花のちることや わびしき、春がすみ たつたの山の霧の音(古今集)

3 命令文 他に動作を命ずる文を命令文といふ。

鶯 來。鳴け。汝等 忠良なる臣民となれ。
汝等 よく勉め よく遊べ。

昔の秋よ かわきだに せよ。(古今集)
己の欲せざる所は 人に施すこと勿れ。

4 感歎文 感歎的に言ひ表す文を感歎文といふ。

あゝ 美なるかな 山河の固。
蟬の聲 聞けば かなしな。
雲がくれにし 夜半の月かな。
あはれ 法皇の 飛されさせおはしますぞや。
初雁の 今朝なく聲の めづらしきかな。

第十章 文章の解剖

文又は句を解きて、其の組織を講ずるを文章の解剖といふ。文章の解剖に語脈の解剖と文脈の解剖とあり。

語脈の解剖 文章を各品詞に解きて其の種類用法を明にするを語脈の解剖とす。
文脈の解剖 文章を文の各成分に解きて各部の関係を明にするを文脈の解剖とす。

左に解剖の例を擧ぐ。

一 語脈の解剖

イ 花 名詞 自動詞、カ四、
 咲く

ロ 我 自稱人代名詞 名詞附屬てにはは
 が 名詞 名詞附屬てにはは
 家 名詞 名詞附屬てにはは
 の 名詞 名詞附屬てにはは
 猫 名詞 形容詞なり活
 大きなる

ハ 鼠 名詞 名詞附屬てにはは
 を 他動詞、ハ下二
 捕ふ

ハ 校長 名詞 自動詞、カ四
 及第せ 活用第二附屬助動詞
 し 名詞 名詞附屬てにはは
 生徒 名詞 名詞附屬てにはは
 に 名詞 名詞附屬てにはは
 卒業證書 名詞 名詞附屬てにはは
 を 他動詞、カ下二
 授く

ニ 花 名 自、カ四
 咲き 名 自、カ四
 鳥 鳴く。

ホ 雪 名 名附て
 は 副詞
 ましろに 自、カ四、第二附助、名 名附て
 積り 同上
 たる 他、カ變 第三附助、名
 時 を
 のみ 愛す べきもの

カ 名附て
 は 同上

ヘ ナポレオン 固有名詞 名附て
 は 副詞 形、カ活
 最も 副詞 形、カ活
 よく 名 名附て
 時間 の
 の 形、なり活
 大切なる 名 名附て
 こと を
 を 他、カ四
 知れ

第五附助動

る 名 名附助動
 人 なり。

ト 鎌倉 固有名 名附て
 は 名 名附て
 高山 も
 なく 形、カ活
 大河 も
 なけれ 形、カ活 第五附て
 ば 名 名附て
 要害 の
 の 名 名附て
 地 名 名附て
 こと

自、ハ四 第三附助、自動、ラ變
 べく トあらトノ約 第一附助
 べから ず。

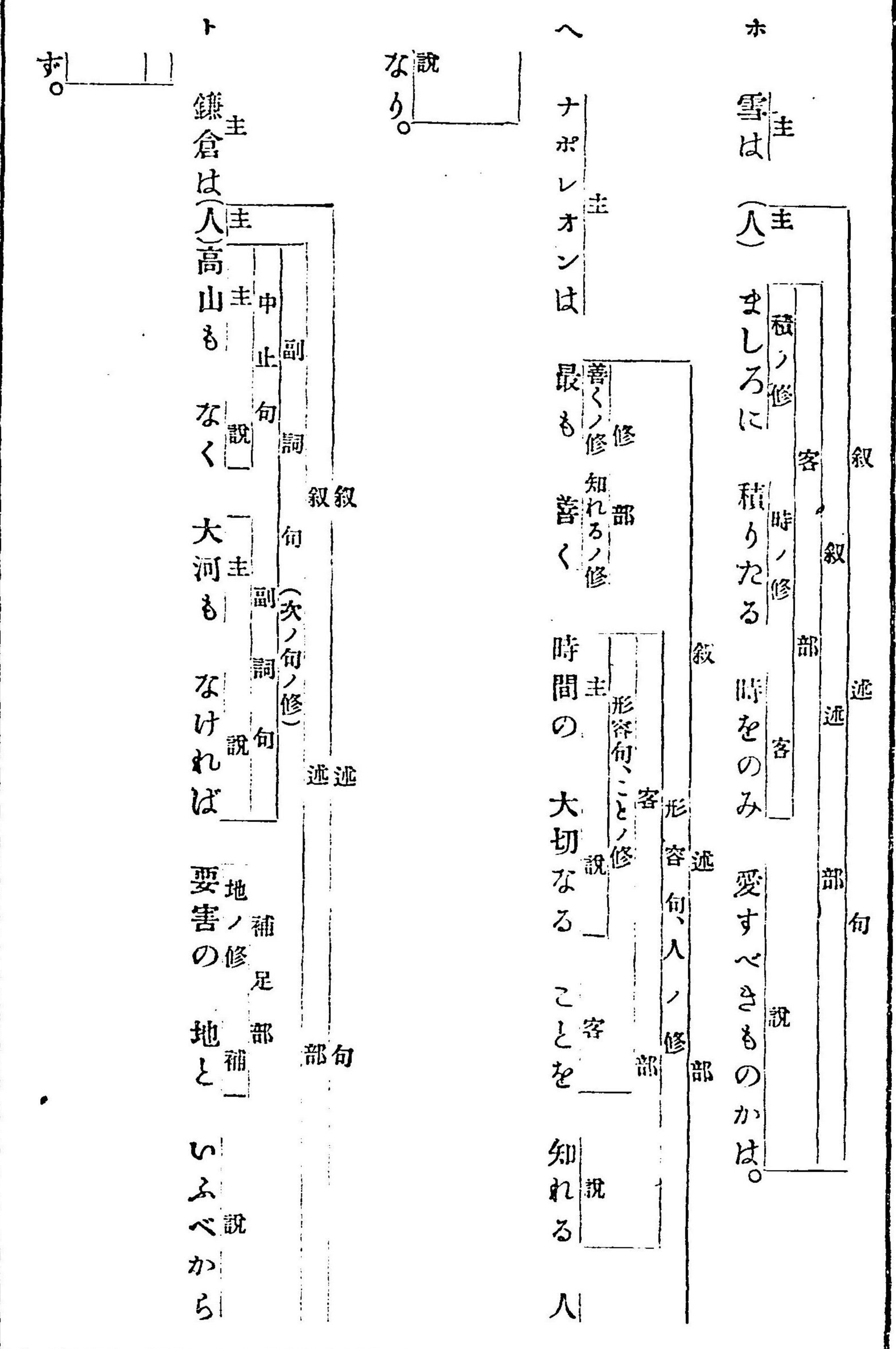
二 文脈の解剖 前例の文を文脈上より解剖すれば左の如し。

イ 花 主語 叙述語
 咲く。

ロ 我が家 主語 叙述語
 の猫 客部
 大なる鼠 客部
 を捕ふ。

ハ 校長 主語 叙述語
 及第せし 補足語
 生徒に 客部
 卒業證書を 客部
 授く。

ニ 花 主語 叙述語
 咲き 中止句
 鳥 主語 叙述語
 鳴く。



右の例に倣ひて、左の諸文を、語脈上及び文脈上より解剖せよ。

- 1 教育勅語と戊申詔書とは我等が身を修め世に處する道を示し給へるものなり。
- 2 皇國の興廢此の一戦にあり。
- 3 日々の天氣は我等の生活に大なる關係あり。
- 4 文明諸國にては何れも氣象臺測候所を置きて日々の氣象を調査す。
- 5 動物は呼吸作用によつて空氣中の酸素を吸ひ炭酸瓦斯を吐出す。
- 6 敵は長圍の計を取れるに我は糧食殆ど盡きたり。
- 7 婦人の道は夫を助けて家を治め子に教へて家名をあげしむるに在り。
- 8 私事は軽く公事は重し。
- 9 火山の破裂は地中の水蒸氣地皮の弱き處を破りてほとばしり出づるより起る。
- 10 我が國の農業中最も開けざるは牧畜の業なり。
- 11 我が國の農業は決して現状を以て満足すべきにあらず。
- 12 農業に従事するものは多く野外にありて清潔なる空氣を呼吸し筋肉を勞するが故に身體常に健全なり。
- 13 人種風俗の異なるによりて人の嗜好も亦同じからず。
- 14 強兵を以て知れたる我が國は富國の道を講ずること今日の急務なり。
- 15 永遠の幸福を云む者は一時の勞苦を忍ぶべし。
- 16 戸締の用心よきは火の用心は一層大切なり。

17 日々の暮しは入るを計りて出づるを制するを第一義とす。
 敵はかなはじと俄に路をかへて逃れ去らんとせり。
 18 新羅の王我がしりを喰へ。
 19 伯林には世界にほころべき程の大建築物なし。
 20

小學校教員
 受驗參考用 **國文法講義** 終

明治四十四年九月十一日印刷
 明治四十四年九月十五日發行

國文法講義
 定價金四拾五錢



著者 井出豊作
 發行 東京市日本橋區鐵砲町三番地
 右代表者 杉本七百丸

東京市京橋區南傳馬町二丁目
 同市日本橋區鐵砲町
 同市日本橋區本石町二丁目
 新潟縣長岡市表四ノ町
 長野縣長野市大門町
 目黒基七
 榑原友吉
 杉本七百丸
 目黒喜太郎
 西澤喜太郎

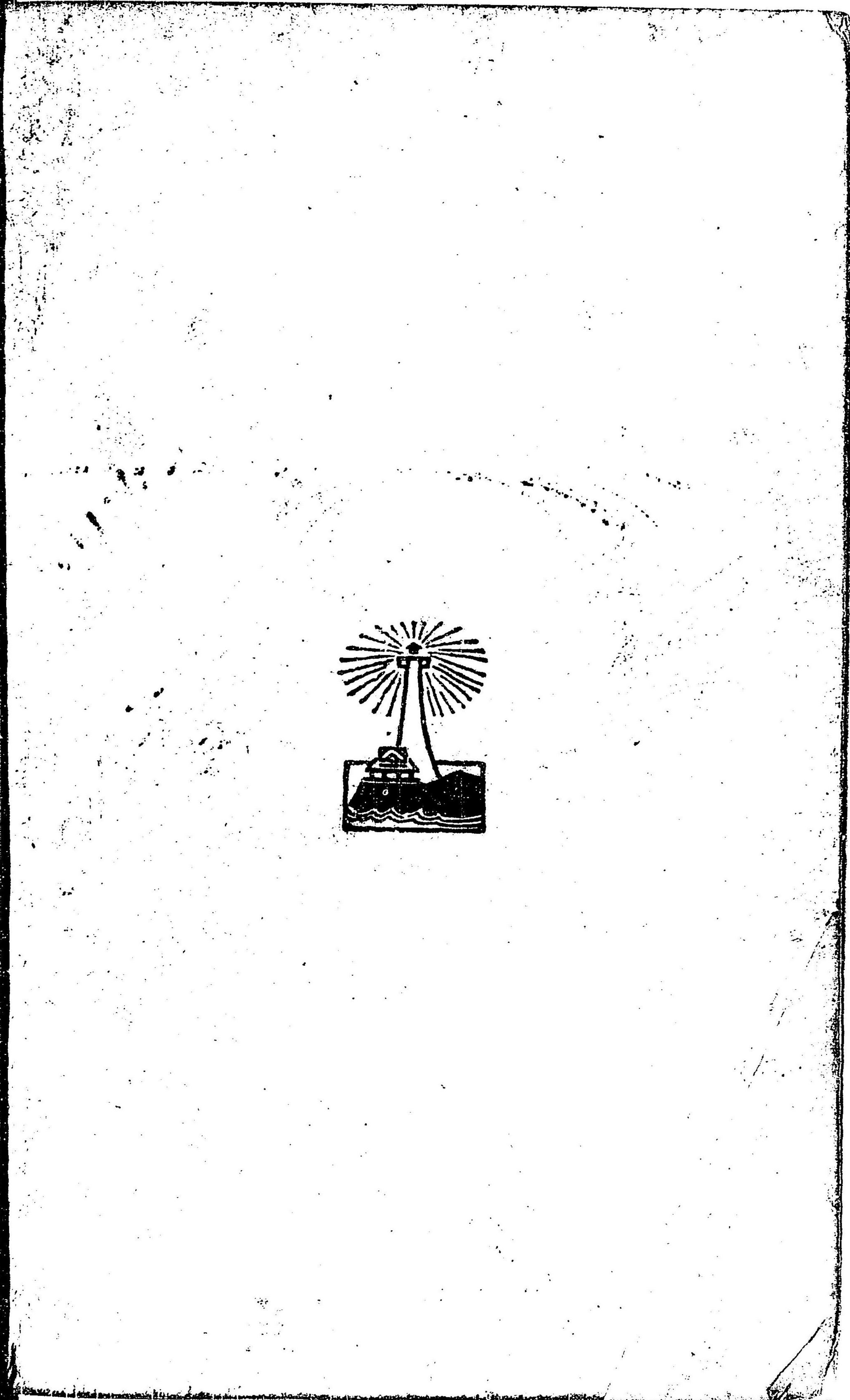
大販賣所

發行所

東京市日本橋區
 鐵砲町三番地

資合社 六盟館

電話特設
 振替口座東京二二五〇番



259.5

28



049852-000-6

259.5-28

国文法講義(小学校教員検定受験用)

教育研究会/編

M44

BEM-0586



